

柚木平吉コレクション

佐藤定

ごあいさつ

己で選んだ道とはいえ佐藤 定氏の絵描き人生は美事というしかない。

私が出会った頃、建部の花はまさに開花の時。行動美術岡山の炎は爆発を予感させられるほど燃えたぎっていた。

とはいえ、年に2度の個展、秋には「行動展(東京)」、春には「岡山巡回展」、「全関西行動展」、その間「仲間展」とそのパワフルさといったら並大抵ではない。

絵描きで食べていくという事のエネルギーと、好きな道で食べているという事への羨望の重さを糧りにかけてみればさて、どちらに傾くであろうか。想像しても多くの方が、ただ腕を組んでしまう事だろう。

まして、現役、バイクでのスケッチ旅行はしなくなったとはいえ、ここ数年の画材の新鮮さ。それにも増しての筆の冴えはすばらしく、個展の度に「うっ!」という作品に出会い続けているのである。

だから個展が終われば、すぐに次の会への期待が湧いてくるのである。私も先生に負けまいと闘争心を掻き立てながら、細々と創作を続けているが実のところ先生には申し訳ないが佐藤 定氏と人生を共に生きながら楽しませてもらっているというのが正直なところなのであります。ありがたい。

2012年11月

柚木 平吉

人の善意に包まれて

この画集は柚木グループの編集作成です。これに掲載された全作品の100余点を一同に公開するのが倉敷市玉島での展覧会で、柚木平吉氏が発信する一大イベントです。僕はまるで風見鶏ですが、内心驚嘆と感激を抑え切れず感謝の手を合わせています。胸中を伝える言葉が何としても見つかりません。報いる術もありません。

僕は1968年、日本の教育のあり方に激怒して教職を捨てました。その時点では、絵かきになる野心も、才能の自覚も、暮らしの手立てもなく「これからは昆虫のように生きていよう」と自分に言い聞かせていました。過去を捨てた昆虫を虚無感が覆いました。

そんなある日、岡山市の塩津誠一先生を訪ねました。初対面で『君は何のために絵を描くんだ』と突然問われ、答えが出てこず追い返される有り様でした。

けれども二度目に『僕は画家には成れません。絵を描いて人に見せる気もありません。ただ描いていればいいのです』と、真っ正直な本音を打ち明けました。

しばしの静寂のあと、『まア来るがいいヨ』と許され門下生となりました。これが僕の運命の分水嶺でした。

数年の後、先生の勧めで岡山市表町の〈ヨシダ画廊〉で個展をしました。教員時代の人脈には一枚の案内状も出さず360度見知らぬ人の中〈0からのスタート〉でした。結果は1点だけ売れる惨敗でしたが、自身の力が的確に測れたことが収穫でした。画廊主吉田宗一さんは画廊代金を分割払いにしてくれ、そのうえ『佐藤さん。辛抱ですぞ、辛抱をわすれなさんなヨ・・・』と重く優しく声を掛けてくれました。昆虫の涙は流れて止みませんでした。吉田さんの言葉は今も胸に抱いています。

1977年ごろから私の個展も少し変容しました。一つには所属の行動美術が岡山に根付き始め責任者の僕が知られかけたのでした。いま一つは常連と言える人々に恵まれ始めたことでした。その中に柚木平吉氏がいました。彼はご存知のように彫刻家ですが絵にも一家言持っていて意に添う絵だと買ってくれるのでした。

出会いの年、1978年。これが今にしてみれば柚木コレクションの始まりでした。この度の催しは、実質〈柚木氏発起35周年記念展〉であり、万感が胸に迫ります。

人生の95%を終了してみると、我が身には勿体ない人々に出会え、シルクロードをはじめ国内あちこちの風土にも触れ、地に暮らす人々の温もりはもとより、四季の風さえ、僕が迎った歳月が遺してくれた宝です。

それゆえ〈僕の絵かき人生〉は“上の特上”と言えます。

心底から万感を込めて感謝を捧げます。

2012年11月

ゴッホより幸せな絵描き人生

絵描きにとって、いちばんうれしいのは、自分の絵を心底気に入ってくれる人との出会いではないだろうか。そして展覧会が開けたとき、もっと欲を言えば、画集なんぞが出せれば、それはもう最高である。

このたび、佐藤 定はそのどれもが手に入ることとなった。この話が柚木さんから持ち上がったとき、「わしは今が人生のピークかもしれん」と、夢心地の顔であばら家の前をふわふわ歩いていた。

佐藤 定は、僭越ながら、かの巨匠ゴッホと共通点が多い。まず、お酒がないと暮らせないところ。それから貧乏なところや、世の中に順応できない、しようしないところなどもそっくりだ。しかし、耳はまだくっついているし、生きているうちに「人生のピーク」が実感できるとは、ゴッホとは比べものにならない幸せ者だろう。かくなる上は、さらなる高みを目指し、次々とピークを生み出すべく「いい絵、を描くこと、それこそが恩義に報いることではないか。これからが絵描きの人生の本腰である。

私は子どものころから、スケッチに同行したり、アトリエで、また画廊や美術館で、佐藤 定の絵を隈なくみてきたが、時を超えて、このように一堂に会したものをみるのは初めてだ。こんな機会に恵まれたことは、感謝してもしきれない。

佐藤 定・娘

ライター 小田由紀子

ある日の佐藤氏

佐藤先生が歩けば（動けば）エピソードは向こうの方からやって来るという程、事欠かない。

あの絵に出会った後の個展会場では、ソヴィエト旅行から帰った直後と見えて、見た目にも厳寒の地からの帰国を思わす風貌で……。頭には例の毛皮の帽子を戴き、顎には鬚。口にはパイプを燻らせていた。

テーブルには缶の蓋を開ければ何ともいわれぬ甘い香りを漂わす葉煙草入れと灰皿、そして何故かそこにヘアピンが1本。

先生、自作のいかげ屋のおやじよろしく椅子にどっかと腰を下ろし、ライターでパイプに火をつける。パイプを吸う度にかすかな煙が紫色に立ち上っていた。

「ウッパウッパ」と吸いながら親指でパイプの口をふさぎながら、その仕草はもうベテランのパイプ愛好家の様を見せていた。

しかし、その後、「ウッパウッパ」は頻度を増し、ゆとりの雰囲気は見られなくなり、反対に吸う度に眉間にしわを寄せ始めたのだ。そして、パイプを口から離し、あのヘアピンでパイプの掃除を始めたではないか。

ハハ～ン、ヘアピンはこの為だったのかと合点。そう言えば灰皿にはまだ火の通っていない煙草の葉が山となっていた。そして、その作業はそれから何度繰り返されただろう。

私が椅子に腰を掛け、話が始まろうとした時、先生手提げ袋からフィルター煙草を取り出し、「まあ、一服じゃ、パイプは疲れますなあ。」と独り言のようにひと言、言い放ったのである。何とパイプをふかすにはもうひとつ休憩の為に煙草がいるらしい。

「シャガールは宙に浮かべるのが実にうまい。」とは、自作のポリシヨイサーカスについて、そして田舎巡りのソヴィエト旅行の話もさることながら、その個展ではパイプばかりが印象に残ったのであった。

翌年の個展にて「あれ、先生パイプを変えましたね?」「パイプ煙草への一途さと我が顎力（学力）のおかげでパイプが2つになりましたな。」と、先生の強烈な歯の力でみごとに食いちぎられたパイプを見せてくれたのである。

なあるほど、先生、何をするにも徹底的な性分とその後にオチを持って来る癖は落語好きの成果と見つけたり。そして、今回は先生の^{いちず}一途さと何もかも噛み砕いて己のものにしてしまう「ガクカ」にまずは頭を下げ、やはり笑いながら会場を後にしたのでした。

私が佐藤定展に一番乗りをする理由^{わけ} そして、Wanted！！

先生は雲の様にふわりふわりと自由自在だ。

それは何事にも現れる。

先生の個展の案内状は少々凝っていて豪華な封書だ。

上半面は油絵、下半面はカレンダーになっていて年2回の個展を続けているので半年分が載っている。これをリビングの壁にでも貼れば、一年中、先生の絵が印刷物ながら楽しめるのだ。すばらしいアイデアである。

表に戻せば開催の日時、場所、プロフィール。そして、その半面にいつも短い文が添えてある。

以前は自身の文で、折々の季節の移り変わりと身近に起きたエピソードがあり、それも読みながらブツと吹き出してしまいそうな笑いを含みながらも行間に詩的な趣きを漂わせた独特の文がおまけのようについていた。

それがいつからか、案内状がポストに来ればまずおまけの方を真っ先に読むようになっていくことに気付いたのである。それは、フリーライターの小田由紀子さんの文になった頃からだったろうか。彼女は「蚕のおくりもの」の他にも数多くの文学賞を受けた作家であり、我が父の事を家族のエピソードの中に織り込み語りながらも、第3の目で絵描き佐藤 定を表現してあり、ある時は辛辣に、又ある時は愛に満ちた筆で書かれた文は私達の前に人間佐藤 定を見せてくれ、より親しみが増すのである。そして、これにもいつもオチがついているからたまらない。

今やその文は多くのファンを持ち案内状の第一面を飾るのにふさわしい存在にまでなっているとと言っても過言ではないであろう。

楽しいのは先にも言ったように先生の案内状も雲のように揺れていることだ。だから、その時々風の強さと方角で届く日も揺れていた。

ある年の事、「昨日から開いています。」という日付のものが届いた。さて、これには驚いた。いくらいの一番に見に行きたい私でも、昨日には戻れない。しかし、これも慣れてしまえば気にする程の事は何もない。展示されている絵が乾いていない物もある事から、その原因は容易に想像出来るからだ。

6月と12月に個展はあるのだから、それはギャラリーへの電話一本で済む事なのである。

しかし、残念な事が今までにひとつあった。

遅れて行ったその個展で私は大失敗を犯してしてしまったのだ。それは、岡山表町金剛荘美術センター（現 art space テトラヘドロン）での事。眼鏡店の隣の細い階段を上がり室に入って右に折れて3番目にその絵はあった。

それはごく小さな額のもので、雛段の下の方に警備の者として立っている「衛士」と呼ばれる人形の絵であった。しかしそれは人形のきれいさも、可愛らしさも、侍の勇ましさも見えず、反対に顔はくずれ、着物は朽ちて人形の芯が見える程で、片方の足の踵はなく、片足だけで立っていて、普通の画家なら絵のモデルにはしそうなもない全く壊れかけの人形の絵だったのだ。

しかし、私はこの絵の前で立ち止まり。動かなかった。私はそれを見た瞬間「これは彫刻だ！」と心の中で叫んでいた。私は又々「すごい絵」と出会ったのだ。それは人形でなくてもよく、ただ額の中では無口で物静かに「私はここに^あ在る。」と、存在感を示すだけのまさに彫刻といえる絵だったのである。しかし、私は失敗してしまったのだ。

なんと、その絵にはもはや小さな赤い印が付けられていたのだ。

残念！そして私は個展にいの一番に来なかった事を悔いたのだ。その後、再会だけでも果たしたくて佐藤先生や画廊主の大林さんに尋ねても行方は思い出せず、行方不明のままなのである。それ以来、先生の個展の芳名録にまず、柚木平吉の名があるようになったのである。

これもひとつの学習の成果であるが、未だに行方知れずのままのその絵に再会したい気持ちは治まらず・・・。

Wanted !!

誰かこの絵の行方を知ませんか？教えてください。

というのがこの文章の主旨なのであります。

よろしく願いいたします。

2012年11月

柚木 平吉